芦峅寺周辺の地蔵さまたち

令和 4 年 10 月 22 日　尾田武雄

○1、名字地蔵と地蔵の呼び名

① 石仏の総数　地蔵の割合

砺波市	1357 体	地蔵 774 体	57%
南砺市	1501 体	地蔵 822 体	54%
小矢部市	1788 体	地蔵 1179 体	66%
高岡市	1839 体	地蔵 1569 体	85%
旧大山町	337 体	地蔵 143 体	42%
立山町	290 体	地蔵 139 体	48%

② 名字地蔵

全国、津々浦々に「お地蔵さん」、とげぬき地蔵、延命地蔵、田植え地蔵、笠地蔵、子授け地蔵、火伏せ地蔵、歯痛地蔵等々いろいろの名のついた地蔵

・砺波地方に伝わる「笠地蔵」の話し

・「正信偈」焚焼仙経帰楽邦（曇鸞は仙経を焼き払って、極楽往生の教えに帰依された）

○砺波の笠地蔵の話

富山県は真宗王国　現世利益や加持祈祷を否定

富山県内では、氷見の餅食い地蔵、砺波市鷹栖に歯痛地蔵

芦峅寺には、いぼ取り地蔵、満願地蔵

③ 地蔵の呼び名

石仏＝地蔵　全国的なのであろうか？

小矢部市	力持ち地蔵	名号塔
高岡市雨晴	首切り地蔵	中世の阿弥陀如来
高岡市戸出	デカ地蔵	近世末の阿弥陀如来
南砺市赤坂	地蔵堂	太子堂
砺波市太田	太子堂	地蔵堂　藤井助之烝の設計図

力持ち地蔵（小矢部市内山）

デカ地蔵（高岡市戸出）

○2　六地蔵

六地蔵の信仰は、藤原時代から始まる「仏説地蔵菩薩発心因縁十王経」には下記のように記し、「仏像図彙」の図像とはほぼ一致する。

尊名	持物		御利益
頂天賀地蔵	左手持錫杖	右手与願印	利楽天人衆
放光王地蔵	左手持錫杖	右手与願印	雨雨成五穀
金剛幢地蔵	左手持金剛幢	右手施無畏	化修羅摩幡
金剛悲地蔵	左手持錫杖	右手引摂印	利傍生諸界
金剛宝地蔵	左手持宝珠	右手甘露印	施餓鬼飽満
金剛願地蔵	左持閻魔幢	右手成弁印	入地獄救世

人の生前の行為の善悪によって死後に，地獄，畜生，餓鬼，修羅，人，天という六道の境涯を輪廻，転生するとされる。
県内では、真言宗、禅宗、などの寺院山門前にある。また墓地の入口などに結界を意味している場合がある。小矢部市周辺地域には道端にある場合がある。

〇芦峅寺閻魔堂前

元は姥堂境内にあった。

嘉永六年（一八五三）に『姥堂境内六地蔵石像造営施主等覚帳』

先祖の戒名、寄進者住所、寄進年次、寄進目的、祠堂金額、制作の方法や日数、制作費用が克明に記されている。

「嘉永六寅年　うば堂境内六地蔵尊石像造営施主等覚帳　願主寶泉坊現住泰音」

長帳　嘉永六年（1853）　　参考文献　福江充著「立山信仰における石仏寄進の一例江戸の信徒によるうば堂境内六地蔵尊石像の寄進―」（『宗教民俗研究』第 8 号　平成 10 年 6 月）

・**信徒の分布と身分**　泰音は江戸各地で廻檀配札活動をしていた。　屋号を持つ商人や職人　旦那帳には 134 人がいた。　大名屋敷も廻っていた。多くの中にも師檀関係を結んでいたものがいたようである。

・総祠堂金額　10 両２朱

石工は富山領新川郡**善名村中嶋栄蔵**に依頼

・**制作年**は嘉永六年（1853）～安政 5 年（1858）の 5 年間

・**制作実費**は 5 両 1 分 2 朱 263 文　宝泉坊が 4 両 2 分 3 朱 149 文残る

・**寄進者**は 3 名が女性。芦峅寺での布橋灌頂会への参加の勧進活動

・**寄進目的**は追善供養３、先祖代々の供養２、家内安全、子孫繁栄１、

・**舟形向背**、六地蔵毎に光背上部に梵字を彫る。高さ 24.4 寸～25.5 寸（約 74 ㎝～77 ㎝）衆生から拝まれるように、目線はやや下向きである。石材はうば谷川から採掘される「うば谷川石」

〇明念坂の六地蔵

貞享二年（1685）の年次銘がある。高さ 120 ㎝前後　浮彫立像。京田良志著『続石の表情』（桂新書）「飛び出したおちょぼ口、大きな耳、首輪をしたような首、そして、衣も手もともかく個性的な彫法である」

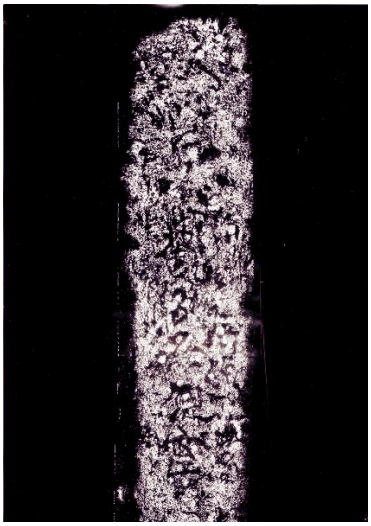
〇布橋六地蔵摩崖仏

・県内の磨崖仏　上市町大岩日石寺不動明王（国重要文化財・平安時代）　富山市上滝不動磨崖仏（市史跡・江戸時代。平安時代ともいわれる）　黒部市嘉例沢の石仏（県史跡・室町時代）南砺市栗当不動明王摩崖仏（江戸時代末期）小矢部市鼓ヶ滝露天磨崖仏（江戸時代末）

・六地蔵の持ち物右から錫杖、蕾の蓮華、宝珠、経巻、念珠、合掌

・銘文「立弘化元空」と追刻がある

・上部に三つの長方形の平面がある。



六地蔵中央にある銘文　　拓影（古川知明氏）

・手水鉢

〇岩峅寺　庚申塚

旧道の三途の川、シデの山の近くにあったものを、ここの庚申塔に移された。明念坂の六地蔵と酷似している。

〇地獄谷

笠塔婆の塔身に六地蔵を浮き彫りにする。文化八年の銘がある。

〇３　薮田石製地蔵半跏像

薮田石製の地蔵菩薩半跏像

石川県と富山県境にある山岳信仰の石動山下に氷見市薮田がある。その周辺の灘浦地区から採掘される石材が白乳色の石灰質シルト岩の薮田石である。富山県全域にわたり中世の石塔類や石仏、狛犬などが散見される。立山山頂には薮田石製の地蔵菩薩半跏像が室堂に１体、玉殿窟に２体、芦峅寺閻魔堂前に２体、墓地に１体が岩峅寺に１体調査報告されている。これらは共に十四世紀の造像で、石動山信仰との関連も推定されている。このような地蔵菩薩半跏像は、富山県西部では神社周辺に多々散見できる。南砺市で７体、小矢部市で１体、砺波市で５体、氷見市で２７体、高岡市で 11 体、射水市で２体、富山市で 10 体、魚津市１体、岐阜県で１体の計 71 体を確認している。薮田石の採掘される氷見市が圧倒的に多いが、砺波地方でも 13 体の報告がある。また富山市などにも多く報告されている。

これらはともに明らかに近世の石仏ではなく、威風堂々とし、写実的で鎌倉時代の作から室町時代の作と思われるものが多い。さて地蔵菩薩は、仏滅後弥勒菩薩が次の仏としてこの世に表われるまで、五濁悪世の無仏世界の衆生の救済を、仏からゆだねられたところにある。

白山信仰の拠点で、白山比咩神社のある石川郡鶴来町白山町の地蔵堂には、通称カタガリ地蔵と呼ばれる地蔵菩薩半跏像がある。これは鎌倉時代の風格を伝える堂々たるものである。これはかつて手取川の渓谷にそそり立っていた舟岡山の岸壁に彫り込まれていた磨崖仏であつた。それが明治 31 年から同 36 年にかけて実施された手取川七ケ用水の、取入口合併工事に伴い切り取られ、現在地に安置されたものである。このお像について「白山諸雑事記」（『白山比咩神社史』所収「妙法の石室と石窟仏」）に「泰澄ノ像ヲ彫刻セリ、今カタガリ地

蔵ト呼ヘリ」とある。これは十四世紀の造像とされる。氷見や砺波地方、能登地方の神社周辺に見られる地蔵菩薩半跏像は、石動山信仰の流布の強さを知るとき、この影響化にあった。石動山を経由した白山信仰の残照のような気がする。

富山市四方に四方神社がある。元は石動大宮と称したその由来書「田島家の旧記、三十四代田島長敏」には次のようにある。

当所ノ石動社御由来ハ本地地蔵尊ニテ、皇女現ワレ御示ニハ、左ニ如意ノ宝珠ヲ御持、右ニ金剛倫ヲ給フ御像ナリ

石動社の本地仏を左手に宝珠、右に錫杖を持つ地蔵菩薩だとしている。これは地蔵菩薩半跏像のように推察している。

○4　八重嶋寄進の地蔵　舟形向背の延命地蔵

相栄坊墓地の嘉永 5 年地蔵菩薩は、台座に江戸城大奥女中八重嶋が寄進した旨の刻銘がある。福江充氏によれば、寄進者の江戸城西之丸付き八重嶋は、13 代将軍家定の上臈御年寄であり、嘉永 5 年に病死するまでその地位にあった。晩年病床にあって、地獄・極楽信仰、女人救済信仰の立山信仰に興味を寄せ、嘉永 6 年 6 月に姥堂へ石仏を寄進したが、奉納時には死去していた。石工は北野甚蔵。

江戸城大奥女性の寄進。六角柱の台座正面に「西御丸」他に「老女八重嶋香益院殿遍譽側空戒心大姉」、「信珠院見性院」、「冬雲院殿清譽浮雪居士」、「瓔珞院曜譽超月山居士」、「超勝院殿變譽一宣恭大姉」、「嘉永五三壬子年八月吉日相栄坊苗清代」、「石工善名村甚蔵」

福江充著『江戸城大奥と立山信仰』

古川知明著「常願寺川石工北野甚蔵について」(『大境』第 32 号)

◎ **古川知明著『立山芦峅寺・立山信仰の石造物　布橋六地蔵編　―鑑賞のてびきー』**

定価　200 円

参考

〇１　三十三ケ所観音

砺波地方では真言宗寺院の参道に多く見られる

砺波市　芹谷千光寺　太田萬福寺

南砺市　福野安居寺　城端城国寺

福光町　殿様街道

中筋往来　庄川町青島～太田まで７キロの間

高岡市　高岡新西国三十三か所観音として昭和初期に造像される

氷見市　上日寺境内に、戦国時代に森寺城の城主であった長沢筑前が寄進した。長沢筑前も観音菩薩を深く信仰し、西国三十三か所の霊場を模し、上日寺に安置他した。この三十三所観音のうち、1572 年（元亀 3 年）の石仏 24 体（5 体に銘文あり）と 1865 年（元治 2 年）の石仏 6 体は、氷見市指定文化財（民俗資料、平成 4 年 7 月指定）となっている。

立山町　岩峅寺雄山神社～室堂平の十里半（42K）多くは文化八年の年号銘

日中　観音堂　宮路　仏事会館　日水　観音堂　上瀬戸公民館（延命寺跡）

布施谷　富山県魚津市と黒部市の境を流れる布施川の中流から上流域を布施谷(フセタン)と呼んでいる。布施川の左岸地域が旧西布施村(現魚津市)で、右岸地域が旧東布施村(現黒部市)である。明治２２年の町村制施行により、下新川郡の小川寺村、蛇田村、長引野新村、長引野又新村、布施爪村、黒沢村、大沢村が合併し、西布施村が誕生した。昭和２７年の市制施行により１町１１村が合併し、魚津市となった。明治２２年の町村制施行により、下新川郡の中陣村、朴谷村、尾山村、阿弥陀堂村、釈迦堂村、内生谷村、笠破村、田籾村、嘉例沢村、池尻村、福平村が合併し、東布施村が誕生した。昭和２８年、下新川郡桜井町に編入された。昭和２９年の市制施行により２町が合併し、黒部市となった。平成１２年に、嘉例沢の全戸が離村した。

黒部市　黒部市笠破観音堂　黒部市田籾観音堂　黒部市嘉例沢観音堂（曹洞宗）　天神野新観音堂　黒部市新町観音堂　朴谷観音堂　阿弥陀堂観音堂　釈迦堂観音堂

魚津市　布施爪観音堂（祭り）　長引野観音堂（祭り）　黒沢観音堂　東尾崎教宝院観音堂　心蓮坊の檀家

朝日町　南保　清水寺　大家庄　天香寺

・西国三十三ケ所

近畿 2 府 4 県と岐阜県に点在する 33 か所の観音信仰の霊場の総称。これらの霊場を札所とした巡礼は日本で最も歴史がある巡礼行であり、現在も多くの参拝者が訪れている。西国三十三所の観音菩薩を巡礼参拝すると、現世で犯したあらゆる罪業が消滅し、極楽往生できるとされる。

千光寺参道（砺波市芹谷）　　布施爪観音堂（魚津市布施爪）

○2　　西国四国秩父坂東神社仏閣に奉納経

芦峅寺閻魔堂

・弥陀三尊

主尊　阿弥陀如来台座

右面　　奉納経　西国四国　秩父坂東　神社仏閣

正面　　阿弥陀尊　奉来迎仏

左面　　五逆消滅　自他平等　即身成仏　文政二卯天　十月成就

左面　　馬瀬口村　中川甚右衛門

（五逆　父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺し、僧の和合を破る、仏身を傷つける）

弥陀三尊（閻魔堂前）　　霊場巡拝供養塔（明念坂）

・霊場巡拝供養塔

明念坂

正面　梵字キリーク（阿弥陀）・ユ（勢至）・サ（観音）　西國　當國　四國　秩父　坂東　霊場巡拝供養塔

右面　三界萬靈　天保四巳星八月吉日敬白

左面　梵字ア（日光）・シャ（月光）・カ（弥勒）　深秀和尚菩提　寺田村重兵エ母ヨソ志入

裏面　梵字ア（金剛界大日）　本願行者教覚坊　教應謹志（カ）　想太夫（カ）」

県内では　砺波市太田　「奉納四国西国秩父坂東供養塔」文化十一年、猪谷、朝日町

○3　義賢名号

義賢名号塔

　義賢名号塔（焔魔堂前）

正面

「南無阿弥陀佛　義賢（花押）」

背面

「天保十一庚子年八月　越後国頚城郡大湊郷福島村　男　関根新左衛門道直建之」

左側面

「増進院心譽常光順行是生居士　忍法院然譽郭真當念妙悟大姉」

　義賢（天明 6 年生～天保 12 年 12 月 6 日寂・54 歳）浄土宗の僧。越後の関根新左衛門『立山参拝記』（天保 3 年（1832））によると、生誕地羽州（うしゅう）村山郡観音寺村（現山形県東根市観音寺）、天明 6 年（1786）生れ、天保 12 年 10 月 54 歳、福井県足羽郡足羽山北麓の森厳寺で入寂。近世後期において、諸国を巡廻して念仏を広めた浄土宗系の捨世派僧侶である。立山参詣をしたとされているが、その業績や足跡の多くは知られていなかった。丸い異様な名号塔に近年石仏研究者の注目を浴びていたが、故伊藤曙覧氏、故京田良志氏、故南金三氏、故久世嘉太郎氏、芝田悟氏、平井一雄氏、滝本やすし氏らによって調査・研究され、徐々に研究が進められている。

　北陸地方での義賢行者の足跡については、報告内容には若干のくいちがいがみられるが、おおむね次のようである。義賢は天保 11 年８月に越後から越中に入って、立山で修行、富山県内の各地を巡錫して９月 24 日に津幡を通り、９月 25 日 に金沢に入った。『加賀藩史料』の「大鋸文書」には、11 月６日に金沢の如来寺を出て 松任に泊まり、７～８日に小松、そして９～10 日の大聖寺までの行程が記されているが、それ以降の記録が残されていない。

　その後、越前に入り大谷寺で修行をされていたが、体調を崩し足羽の森厳寺で静養された。しかし回復することはなく、12 月６日に森厳寺で入寂された。義賢の葬儀を行った 福井市の横山家一族には、義賢の葬儀の記録や分骨が残されているまた明治 29 年に義賢の墓は森厳寺に建てられたが、廃寺となり真照寺に移された。その後真照寺も廃寺となり、有楽町の浄土宗教会に移された。浄土宗 教会はその後狐橋２丁目に新しく建て直さ れ、義賢の墓標も同時に移された。

　県内には立山町や富山市を中心に義賢名号塔は名号掛け軸・肖像掛け軸など浄土宗寺院などに残されている。芦峅寺閻魔堂前にある天保１１年８月に建立された、義賢名号塔の寄進

者である越後国中頸城郡西福島村（現頚城村）の関根新左エ門宅には「天保十一子年九月　越中立山参詣記　福嶋邨関根氏控」なる文書が残されている。

　岩峅寺佛事会館横にある義賢名号塔は、高さ 116 ㎝、幅 57.7 ㎝、厚さ 34.4 ㎝の自然石に刻字されている。「（右側面）天保十三年壬寅八月造立　（正面）南無阿弥陀佛　義賢（花押）願主歡詮」とある。義賢立山参詣の二年後に造立されたことになる。願主の歡詮は義賢の信者であったのであろう。そして義賢は立山信仰と関わりが深いことが分かる。

義賢名号一覧は滝本やすし氏の作成であり、ご教示を受けた。

浄土宗の遊行僧。いわゆる徳本行者のような僧

義賢木像（金沢市常安寺蔵）

義賢名号（福井市泉通寺）

義賢名号塔（小矢部市坂又）

芦峅寺墓地

岩峅寺仏事会館

義賢名号塔一覧　（富山県）　●名号塔　◎名号書　○その他

富山県	黒部市生地	解脱庵墓地	昭和７年	1932	●一般墓標	2010/05	T
	黒部市生地	光明寺（廃寺）			◎絵像名号書※		㊙
	魚津市諏訪町	大泉寺境内			●		HOT
	立山町宮地	仏事会館	天保 13 年	1842	●		T
	立山町芦峅寺	閻魔堂前　(1)	天保 11 年	1840	●		T
	同	同　(2)			●　現存しない		(H)
	立山町芦峅寺	共同墓地　(1)			●		T
	同	同　(2)			●一般墓標　現存しない		(H)
	同	同　(3)			●一般墓標　現存しない		(H)
	立山町西大森	徳成寺境内			●		T
	富山市四方西岩瀬	医王寺門前(1)	弘化２年	1845	●		T
	同	同　墓地(2)	嘉永５年	1852	●一般墓標		T
	同	同　同　(3)	嘉永６年	1853	●一般墓標		T
	同	同　同　(4)	年号なし	----	●一般墓標		T
	同	同　同　(5)	安政３年	1856	●一般墓標		T
	同	同　同　(6)	平成 18 年	2006	●一般墓標	2008/	T
	富山市梅沢３丁目	来迎寺　(1)			◎		㊙
	同	同　墓地(2)			●		T
	富山市石田	称名寺跡地	天保 13 年	1842	●		T
	射水市八幡町２丁目	光山寺　(1)			○義歓木像	2010/12	HTI
	同	同　境内(2)	天保 14 年	1843	●		T
	射水市立町	大楽寺			◎		㊙
	射水市立町	曼陀羅寺　(1)	年号なし	----	◎	2010/11	HTI
	同	同　(2)	年号なし	----	○入寂絵像	2010/11	HTI
	同	同　墓地(3)	年号なし	----	●一般墓標	2010/11	HTI
	射水市中央町	江柱庚申堂横	年号なし	----	●義歓墓標		HT
	射水市港町	漁民義人塚	年号なし	----	●		H
	射水市三ケ水源町	路傍	弘化３年	1846	●正面は地蔵		T
	射水市庄西町１丁目	路傍			●		㊙
	高岡市博労町	極楽寺墓地	明治　年	****	●一般墓標	2010/11	TI
	高岡市坂下町	極楽寺墓地(1)			●一般墓標　現存しない	2010/05	(HT)
	同	同　同　(2)			●一般墓標　現存しない	2010/05	(HT)
	同	同　庭園(3)			●　現存しない	2010/12	(TI)
	高岡市千木屋町	西福寺墓地	大正６年	1917	●一般墓標	2010/05	HT
	小矢部市中央町	大念寺			◎	2010/10	T
	小矢部市坂又	称名寺跡地	弘化４年	1847	●		T
	小矢部市長	福永家			◎		㊙
	小矢部市埴生	個人			◎		㊙

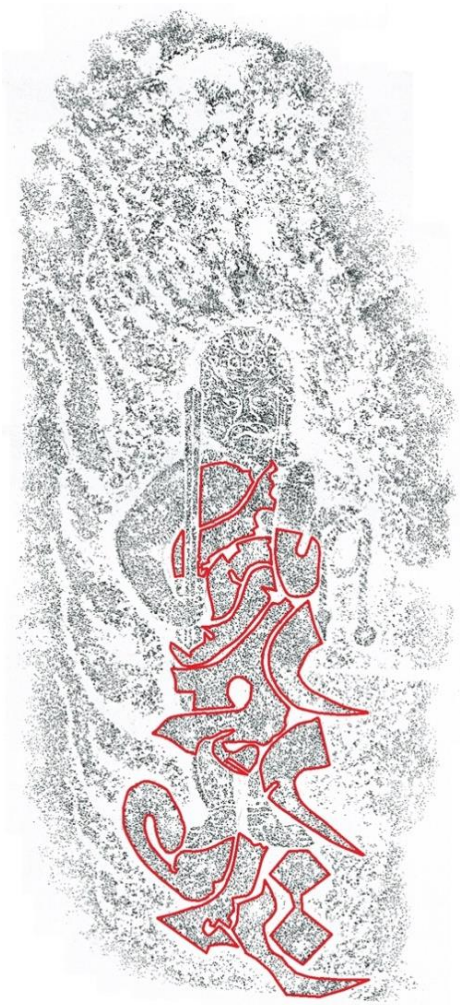
（表末尾のＴは滝本やすし、Ｈは平井一雄、Ｏは尾田武雄の調査である）

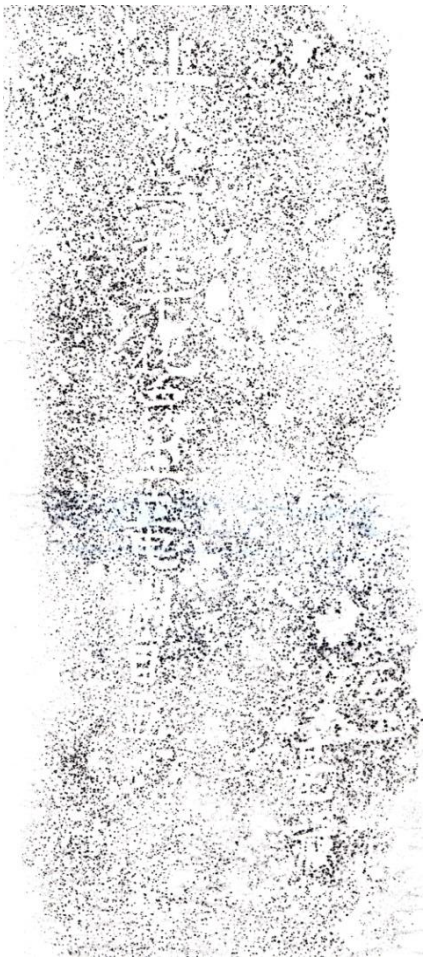
滝本やすし作成

○4　梵字不動明王

これは梵字種子（ぼんじしゅじ）をデフォルメして絵にした「文字絵」といいます。不動明王は、カンマ―ンという梵字種子が身体に使われています。ためしに梵字部分を抜き出してみました。このお不動様は、江戸時代、芦峅寺で布教活動を行った真言宗の僧侶　龍淵法印が下書きをしたものです。火炎向背、右手に剣、左に羂索、天地眼、牙上下出、憤怒相である。　文政７年に彫られたものである。

手水鉢銘文　「為師匠父母」「淡路三原市田　五大力山法印竜淵」「文政七申秋　善名石工甚蔵」とある。龍淵は淡路国三原郡櫟田五大方山出身。五大力山遍照院願海秘密一乗寺（現願海寺）恩師は龍成上人のもとで修業する。（古川知明「富山石文化研究所ブログ」より）





右側面に「石工甚蔵　上求菩提下化衆生　竜淵自画」
（拓本　古川知明）

磨崖六地蔵脇の手水鉢

自然石を利用した石。聖域に入る前、清水で手や口を漱ぎ、穢れを払う役割がある。

○5　芦峅寺閻魔堂周辺の石工銘について

弥陀三尊	閻魔堂前	中川甚右衛門　文政 2 年（1819）（馬瀬口村）
手水鉢	閻魔堂参道	石工甚蔵　文政 7 年（1824）（北野）（善名村）
梵字不動明王像	閻魔堂参道	石工甚蔵　文政 7 年（1824）
阿字観碑	閻魔堂前	善名甚蔵　文政 13 年（1830）
地蔵	芦峅寺共同墓地	善名村甚蔵　嘉永五年（1852）
六地蔵	閻魔堂前	中島栄蔵　嘉永 6 年～安政 5 年(1853～1858)(善名村)

○6　烏臼八（ウハッキュウ）

鴿（烏八臼）

室町時代末より江戸時代中期の曹洞宗、浄土宗関係の墓地に多いとされる。この字義については江戸時代よりいろいろな説が提示され、それらを要約すると次の通り

① 鳥の意
② 鳥を追う鯢（ゲイ・サギに似た水鳥）の変化したもので、この鳥名を墓標に彫ることによって供物に近づく鳥を払う
③ 月日の意
④ 優婆塞、優婆夷の意
⑤ 梵字の合字の崩れ
⑥ 吽の合字
⑦ 大迦葉が成仏の印として弟子の受けた字形
⑧ 烏八臼のキュウは「キ」すなわち帰と八とのキ八に臼の「ウ」を加え、キ九すなわち帰空を現す
⑨ カン、タンと読みツイバムの意、むかし屍を林中に捨て、鳥に啄ませ空に帰るよう、墓碑の頭に用いた

（『日本石仏事典』）